

「源おぢ」論

岩崎文人

国木田独歩の『欺かざるの記』は、その副題がよく示すように、文字どおり独歩の青春の「事実―感情―思想史」であり、作家以前の独歩の精神のありどころが克明にうかがえるものである。

この日記は、起筆されたのが明治二十六年二月であり、擱筆されたのが明治三十年五月であるので、足かけ五年間におよぶものである。おおまかに言って、佐伯在任以前の新聞記者生活、佐伯での教師生活、従軍記者生活、佐々城信子との邂逅・結婚・離婚、処女作「源おぢ」（『文芸倶楽部』）に発表された際は「源叔父」であったが、第一文集『武蔵野』に収載されるに当たって「源おぢ」と改題される―正しくは「源をぢ」とすべきところ―）を書き上げるまでといったことがら、かなり詳細に記されている。最終記事は「十四日より十五日にかけて湯本に遊びぬ。本日『源叔父』を太田氏まで送りぬ。菊地氏より来状ありたり。昨日父上より来状ありたり。」（明30・5・18）というきわめて簡略なものである。

よく知られているように、明治三十年になると、それまで若干の遺漏はあるにしても、精力的に書き続けられてきた日記はいよいよ

断片的になり、特に四月は二十二日と二十三日の二回の記載のみで、五月もまた十三日と先に挙げた引用文が書かれただけである。しかし、このことはかならずしも詳述すべきことがなかったということの意味するわけではない。たとえば、明治三十年四月二十一日から田山花袋とともに日光の照尊院で共同生活を始めるのであるが、従来の独歩であれば多くの紙数を費して記したにちがいないこうしたことがらも、断片的な覚え程度で終っている。「欺かざるの記」を細部にわたって読んでいくと、独歩の青春の軌跡をほぼ再現できるが、この期のこととは逆に花袋の書いたものなどによってさぐる手がないくらいである。

こうしたことから、実は、独歩が日記という形式で自己を語るといったことにはすでに倦み、異なった形で自己を表現しようとする創作意欲が熟していたことを示すものといってよい。あとで詳しく述べるように、事実『欺かざるの記』は明治二十九年五月九日にその終わりが宣言されてもいる。それ以後の日記は作家独歩としての準備期としてとらえることができる。先に引いた明治三十年五月十八日の記事は、「源おぢ」の原稿を書き上げ、太田玉茗宛に送ったというものである。

ところで、文献で知り得るかぎり、最初に意図されたのは、処女作である「源おち」ではなく「武蔵野」（原題は「今の武蔵野」であるが、のち改められる）である。

「欺かざるの記」明治二十九年十月二十六日の項に、「午後、独り野に出て、林を訪ひぬ。プッシング、ツー、ゼ、フロント、を携へて。林中にて黙想し、回顧し、睥視し、俯仰せり。「武蔵野」の想益々成る。（中略）われは唯詩人たるべくのみ今日まで発達し来れり。吾は此の運命を満足す。「武蔵野」はわが詩の一なり。」とあり、「武蔵野」の構想はすでにこの頃から練られ始めてあり、しかも、文脈から推察するとかなり具体的な像を結びつつあることがわかる。しかし、実際に完成されたのは、「武蔵野」本文にも「画や歌で計り想像して居る武蔵野を其俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ではあるまい。それほどの武蔵野が今は果していかにあるか、自分は詳はしく此問に答へて自分を満足させたいとの望を起したことは実に一年前の事であつて」とあるように、ほぼ一年のちである。

「武蔵野」は雑誌『国民之友』明治三十一年一月と翌二月とに分載されたものであるが、特に最初に発表された第一章から第五章まで（以下便宜上第一章から第五章までを前篇、それ以後を後篇と呼ぶことにする）は、「欺かざるの記」を引用し、さらにツルゲーネフの「あひびき」を援用しながら、秋から冬にかけての武蔵野の自然を描写したものである。

はやくから構想され、しかも、さして分量の多くない「武蔵野」よりも、「源おち」の方が先に完成し発表されたというところに、実は、この期の独歩の精神のありどころがうかがわれ、また「源お

ち」の創作動機をも知ることができるのではあるまいか。ここでは、こうしたことごらを観点にすえて「源おち」の独歩における意味を問うてみたい。

二

この小文で「武蔵野」論を展開するつもりはないが、「武蔵野」の性格についてまず言及しておきたい。

「武蔵野」は先に触れたように『国民之友』に分載されたわけだが、前篇は主として佐々城信子の愛を失った傷心の独歩が逍遙した武蔵野が根幹にあり、続いて発表された後篇は信子とともに散策した回想の武蔵野が中心にあり、両者の底を流れる共通のモチーフは失った信子への愛惜である。たとえば、

九月七日「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき林影一時に煌めく、」と「武蔵野」に引かれている「欺かざるの記」の原文は次のようなものである。

七日。（略）昨日も今日も南風強く吹き、雲霧忽ち起り、突然雨至るかと思れば日光雲間よりもれて青葉を照らすなど、気まぐれの秋の空の美はしさ。

実に昨年の事夢の如し。今や信子は北に在りと云ふ。哀れなるは吾が身の上かな。

「武蔵野」前篇は「自分は材料不足の処から自分の日記を種に見たい。」と述べられてもいるように、「欺かざるの記」明治二十九年九月四日より翌三十年四月二十日までの東京市外渋谷村での

生活記録の抜萃が大きな比重を占めている。しかし、ほぼ忠実に「武蔵野」において再現されているのは自然描写のみであって、先の引用における比較からもわかるように、信子に関する記述は意識的に消去されている。

前篇の武蔵野が秋から冬にかけての描写で、主として実際に独歩が生活していた現実のそれであるに比して、後篇は夏の武蔵野で、しかも回想の中でとらえられているが、その創作方法はいささかも崩れない。

「今より三年前の夏のことであつた。自分は或友と市中の寓居を出て、三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて北へ真直に四五丁ゆくと桜橋といふ小さな橋がある。それを渡ると一軒の掛茶屋がある、此茶屋の婆さんが自分に向て、『今時分、何にしに來た』と問ふた事があつた。自分は友と顔見合せて笑て、『散歩に來たのよ、たゞ遊びに來たのだ』と答へると、婆さんも笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、『桜は春咲くこと知ねえだね』と言つた。(中略)茶屋を出て、自分等は、そろ／＼小金井の堤を、水上の方へとほり初めた。あゝ其日の散歩がどんなに楽しかつたらう。』という場面は、『欺かざるの記』に記されている「遂に桜橋に至る。橋畔に茶屋あり。老媪老翁二人すむ。之に休息して後、境停車場の道に向ひぬ。橋を渡り数十歩。家あり、右に折る、路あり。此の路は林を貫て通ずる也。直ちに吾等此の路に入る。林を貫て、相擁して歩む。恋の夢路！」(明28・8・11)に拠っている。「武蔵野」にある「あゝ其日の散歩がどんなに楽しかつたらう」という一文には、もはや暗い翳りはないが、やはりその背後にあるものは喪失の悲哀である。

今ここで独歩と信子との恋の顛末を詳述する余裕はないが、この論を成すに当たって少なからずかかわりがあるので、ひとまず年譜的にとらえておくことにする。「愛弟通信」によりかなりの名声を博した独歩と矯風会の有力メンバーの一人である佐々城豊寿の令嬢信子との邂逅は明治二十八年六月であり、結婚は同年十一月十一日であり、いささか早い不自然な破局は翌二十九年四月十二日である。この間の消息は「欺かざるの記」後篇に詳しく記されているが、信子を失った傷心の独歩は二十九年五月十日以降同年八月十三日までの三ヶ月間というもの全く日記の筆をとっていない。この事実だけからしても離婚という尋常でない出来事が、独歩の心を深く抉つたであろうことは容易に想像できる。

明治二十九年五月九日の記述は次のようなものである。

欺かざるの記の最初(二十六年二月)より今日まで三年三ヶ月と九日なり。

余が生涯はこゝに一変せざる可からず。

回想記を書し、苦惱記を書し、日記を書し、独語して慰藉せんよりも、凡ての過去を過去となして、一心不乱、前程に進むの生涯たらざる可からず。

故に筆をこれに措き、此の記はこゝに閉ぢ了はることゝなしたり。望は前に在り。過去よ、去れ。勉励と活動と計画と来れ。追想と低徊と独語と、去れ。

ここにみるように「欺かざるの記」は事実上終えられたとみてよい。以後八月十三日までの空白の期間、独歩は民友社を退き、京都にいる内村鑑三を訪ね渡米を企ててみたりもするが意のままにならず、結局、民友社同人山路愛山の好意により渋谷村に居住し、再び

『欺かざるの記』の筆をとることになる。

それ以後の日記は文学者独歩としての準備期としてとらえてよい。「若き夢よ、さめよ。美こそ我の、人の求むべきものなれ。美は自由なり、平和なり、神聖なり、無限なり。我は愛を失ふて美を得んとしつゝあり。」(明29・8・14)、「断乎文学界に突入せんと欲す。われは宗教の人たらんと欲し、文学の人たらんと欲するが如きことをせず、ただ此の夢よりのがれ出で、天光に浴せんことを希ふのみ。われには何者をも要せず、たゞ此の美なる天地を信じ得れば足る。而して今は吾が心已に此の美にさめつゝあるが如きを覚ゆ。嗚呼美にして静、幽にして玄なる自然よ。東京の生活、詩人となりてわれは飢えん。」(明29・8・26)等と記されている内容は、その辺の事情をよく示している。

しかし、依然として「神も照覧ある如く、わが心はしばしも彼女の女の上より離れざるなり。彼の女を恋ひ慕ふ心の苦しみはやゝ失せたれど、何事につけても想ひ連ねて来るものは彼の女なるぞうたてき。」(明29・8・18)、「夢に彼の女を見たり。彼の女曰く君に帰る程に雑誌を起し給へといへり。」(明29・9・19)、「吾が信子に対する愛は変らざらむことを期す。余は独身を希ふ。」(明29・9・30)といった文章が随所に見られ、まさに信子への未練の書といった一面も強い。こうして、先述した「武蔵野」の構想となる。

明治二十九年十月二十六日の記述を見るかぎり、「武蔵野」は輪郭のはっきりとしたものであったと受けとれる。また『欺かざるの記』をみてもわかるように武蔵野の観察は不断になされてもいる。しかも、「武蔵野」発表まで、散文詩ともいふべき「たき火」(明29・11)、「星」(明29・12)、「源おぢ」、「おとづれ」(明30

・11)等がそれぞれ発表された他、佐伯での遇逢観察録ともいうべき「若き田舎教師」、「従軍記者」と題する千代田艦での見聞をもととしたもの、恋愛を中心とした「わかき血」と題するもの(明30・1・31 田山緑彌宛書簡)、あるいは諷刺小説(明30・4・16 中桐確太郎宛書簡)などが意図されたりもするが、『欺かざるの記』にも今日残されている書簡にも、小説「武蔵野」のことは先に引用した十月二十六日の記事以外には見られない。

以上のことをふまえたうえで、いよいよ「源おぢ」についてみていくことにする。

三

「源おぢ」は、明治三十年五月に完成し、同年八月「文芸倶楽部」に発表されたものである。独歩はこの作品について、後年「予が作品と事実」(明40・9)の中で次のように述べている。

◎源叔父(「武蔵野」に在り)

は源叔父其人も「紀州」と称する乞食の少年も実在の人物である。余が豊後の佐伯町に居た時非常に接近せるのみならず言葉も交はし其の身の上につき深く同情を持ちしことある人物である。而して此一編中に記述したる此兩人それらの身の上の事も事実である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一編が作品となったのである。

独歩自身も解説しているように「源おぢ」は、明治二十六年九月から翌二十七年八月まで鶴谷学館教師として大分県佐伯に滞在した際に体験した事実に基づいて創作されたものである。ここではなは

だ興味深いのは、△源叔父△も△紀州△もともに独歩が言葉を交わし、その身の上について深く同情した実在の人物であるが、ふたりに結びつけたのは独歩の「想」であると語っている点である。たしかに△源叔父△も△紀州△もともに実在の人物であり、「欺かざるの記」あるいはその他の小品にもしばしばとりあげられた人物である。

△源叔父△のモデルについては、「欺かざるの記」明治二十七年七月二十三日の項に「昨夜雨あり今日雨あり、人再生の思ひあり、青稻蘇生の色あり。昨夜涼風に乗じて宿処の主人等と語る、夜更けて雨をきゝつゝ一文を草しぬ」とあるが、ここで話題になった人物であり（小野茂樹『若き日の国木田独歩』）、高原嘉次郎という現在の佐伯市西上浦小福良落網代出身の老船頭（松本義一『「源叔父」アルバム』）がそれにあたる。

△紀州△については、「欺かざるの記」にも「憐れなる児」（明26・11）、「潔の半生」（明26・11）あるいは「豊後の国佐伯」（明28・5）にもかなり詳細に書き込まれている。

昨夜船頭河岸にて例の乞食に遇ふ。彼れ噂の如く果して五味捨て場の汚物をさぐり何物か拾ひ出しては口に運び居たり。収二をして柿一個与へしむ。余問ふ汲き乎。答ふ、甘いと其声、只だ其れ味いと言ふ意味の外の情を含めず。声、調子、様子、只だ言ふ甘い、感謝の意もなく恥辱の意もなく大喜悦の意もなく失望不平の意もなし、只だ言ふ甘いと。哀れむ可き哉。此乞食十八九歳の由、学校の生徒より聞きぬ。昨夜又た此乞食の事を聞きたゞしぬ。自ら言ふ紀州の者なりと故に此乞食を呼びて紀州と称し誰れも其の親あるやなきやを知らず。已に余程以前より佐伯に在りと。彼

の老翁、此乞食、共に悲しき物語ならずや。（「欺かざるの記」明26・11・27）

ほぼ一年間の佐伯生活が、文学者独歩を考えるうえでどのよう重要な意味を持っていたかは、すでに多く指摘されているので、ここでは言及しない。ただ右に記されている△源叔父△△紀州△といった何らかかわりのない、それでいてどちらも幸薄い人物がどのよう同一平面に描かれていったかについて触れてみようと思う。

余が初て短篇小説を書いたのは今より十年以前である、それより更に五六年前余は覚束なき英語教師として豊後国佐伯町に一年間滞在して居たが、当時余は最も熱心なるワーツワイス信者で、而てワーツワイス信者に取りては佐伯町は実に満目悉くワーツワイスの詩編其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、実にワーツワイス信者をして「マイケル」の二三は此処彼処に転がつて居そうに思はしめた位である。（「不可思議なる大自然」明41・2）

ワーツワイスの「マイケル」はグラスシアという岩や石に囲まれた奥深い寂しい谷間に住むマイケルという老羊飼いと息子ルークの物語であるが、独歩は、ワーツワイスの詩想に触発され「種々の悲しき、貴き、深き物語」をさがし求めて佐伯の町を散策した當時を回想して以上のように記している。つづけて独歩は「余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出来なかつた。人間と相呼応する此神秘にして美妙なる自然界に於ける人間なればこそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事実として余に現はれたのである。」と語っているが、これは独歩文学の源流がどの辺にあるかということをよく示している。独歩ははやく創作の題材となるものと

して、八芳島と女島との間の渡守り▽八船頭町より木立村の間を渡す舟子▽八十二段（山名）の山腹にて逢ひし老樵夫▽八こじき紀州▽などを「欺かざるの記」の中より抽出しているが、こうした人々はまさしく独歩の言うところの「神秘にして美妙なる自然」のもつて名もなく社会の底辺で平凡に生きている小民なのである。「新時代の要求とは何であるか」という問に對し、「人を社会の一員として視るばかりでなく、天地間の生命として觀」「此不思議なる、此無窮無辺なる天地の間に介立し」「其玄と其妙と其大とを通過し、而て煩悶せよ（「紅葉山人」明35・4）と記した独歩の精神がとらえたものである。

こうした文学理念の中で△紀州▽と△源叔父▽はとらえられていくのである。

げに珍からぬ人の身の上のみ、かゝる翁を求めんには山の蔭、水の辺、国々には沢なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たゞ何者をか秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱の如き思す。こは余が例の怪しき意の作用なるべき歟。さもあらばあれ、われ此翁を懐ふ時は遠き笛の音きゝて故郷恋ふる旅人の情、動きつ、又は想高き詩の一節読み了はりて限りなき大空を仰ぐが如き心地す

従つて△源叔父▽も当然「山の蔭」「水の辺」といった自然を背景にしてとらえられる。そして独歩は△源叔父▽の物語の背後に、ワーズワースがマイケルの物語に感じたと同じように、人間存在の根源、魂の故郷を感じ、「誰一人開く事叶はぬ箱」を開いていくのである。

四

都より一人の年若き教師下り来りて佐伯の子弟に語学教ふること殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、こゝより校舎に通ひたり。斯くて海辺にとゞまること一月、一月の間に言葉かはす程の人識りしは片手にて教ふるにも足らず。其重なる一人は宿の主人なり。或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もやゝ荒きに、独を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し縁先に来りぬ。（中略）夕闇の風、軽ろく雨を吹けば一滴二滴、面を払ふ三人は心地よげに受けて四面山の話に入りぬ。

其後教師都に帰りてより幾年の月日経ち、或冬の夜、夜更けて一時を過ぎしに独小机に向ひ手紙認めぬ。そは故郷なる旧友の許へと書き送るなり。其物案じがほなる蒼き色、此夜は頬の辺少し赤らみて折々何処ともなく睥視るまなざし、霧に包まれし或物を定かに視んと願ふが如し。

霧の中には一人の翁立ちたり。

はなはだ引用が長くなつたが、右が「源おぢ」の冒頭部分である。「年若き教師」は都から秋の中頃佐伯にやつて来て約一年間滞在し、夏の中頃去つていったとあるところからもわかるように、独歩の像とほぼ重ね合わせる事ができる。△源叔父▽池田源三郎はこの語学教師によって照明があてられていくが、こうした形式ははやく「憐れなる児」にみられる。この作品は独歩の習作ともいふべき小品であるが、その冒頭に「一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下

りて坂本老人と物語す。座に嬢と収二とあり、互に四方山の噂に笑声相続く。最も楽しき晩なりしなり。佐伯の町に一個の小乞食あり。此乞食の身の上も亦た話の種となる。其の不潔なることを語られ、而して又其愚鈍なる事語られ互に哀れがりぬ。」とある。もつともこの作品の力点は、坂本氏宅に寄宿している乞食と同じ白痴の孤児ではあるが、「源おぢ」の遠い原型とみてよい。

ところで、語学教師は宿の主人から八源叔父Vの半生のあらましを聞かされただけであり、その後の八源叔父Vについては何一つ知らない。「源おぢ」は「上」「中」「下」とわかれており、「上」では語学教師を仲立ちとして宿の主人の語る八源叔父Vの身の上が語られ、「中」「下」で八源叔父Vの後半生が作者の筆を通して語られるという構成のうえでかなりの工夫がなされている。「源おぢ」はあとでみるように悲劇的な結末になるわけであるが、教師は全く八源叔父Vのその後の運命を知らないという、いわば二重の悲劇ともいべき構図を持っている。見方を変えると、「上」において語られている八源叔父Vの身の上は現実のものであり、「中」「下」で語られていく八源叔父Vと八紀州Vの物語こそが独歩の虚構によるもの、つまり独歩の「想」がこらされている部分であり、問題の焦点はここにある。

以下、作品にそつて八源叔父Vと八紀州Vの物語をみていくことにする。

その頃渡船を商売としていた者が多い中で、八源叔父Vの名前は浦々にまで鳴り響いていた。それは彼が「俠気ある若者」であっただけでなく、櫓をこぎながら歌う美声のためであった。その彼の美声がいよいよ冴えわたったのは美しい妻百合を迎えた頃であった。

ふたりにはかわいらしい男子幸助が生まれ幸福な月日が流れていく。しかし、その幸福な年月もさして長くは続かない。幸助が七才の時、百合は二度目の産が重く死んでしまう。もとより言葉数の少ない八源叔父Vはいよいよ言葉少なくなり、笑うことも稀になる。酒の勢いでも借れないかぎり歌うことさえなくなってしまう。不幸は重なり、いつも客と一緒に舟に乗せて慈しんでいたひとり子幸助をも十才の時失ってしまう。

渠は最早や決してうたはざりき、親しき人々にすら言葉かほすことを避くるやうになりぬ。物言はず、歌はず、笑はずして年月を送るうちには如何なる人も世より忘れらるゝ者と見えたり。源叔父の舟こぐ事は昔に変わらねど、浦人等は源叔父の舟に乗りながら源叔父の世に在ることを忘れしやうになりぬ。斯く語る我身すらをりく源叔父が彼の丸き眼を半ば閉ぢ櫓担ひて帰り来るを見る時、源叔父はまだ生きてあるよなど思ふことあり。

度重なる不幸を経て八源叔父Vはもはや歌うこともなく、親しい人々とさえ言葉をかわすこともなくなり、ついにはこの世に存在することさえ忘れられてしまう。こうして八源叔父Vは天涯孤獨な渡守になる。

これが語学教師の知ることのできた八源叔父Vの半生である。「源おぢ」のもうひとつの主要人物八紀州Vは次のように描き出される。

源叔父の独子幸助海に溺れて失せし同年の秋、一人の女乞食日向の方より迷来て佐伯の町に足をとどめぬ。伴ひしは八歳ばかりの男子なり。(中略)次の年の春、母は子を残して何処にか影を隠したり。(中略)初は童母を慕ひて泣きぬ、人々物与へて慰め

たり。童は母を思はずなりぬ、人々の慈悲は童をして母を忘れしめたるのみ。物忘れする子なりともいひ、白痴なりともいひ、不潔なりともいふ、口実は様々なれど此童を乞食の境に落しつくし人情の世界の外に葬りし結果は一つなりき。

この薄幸の孤児△紀州△も初めは町の人々の慈悲、愛情を受けてはいるが、やがては「人情の世界の外」に葬りさられてしまふ。独歩はこの奇しき運命の子を「彼は獸を去る只だ一步、而かも彼れ甚だ正直。殆んど小児の如し」とその事実を直視しながらも、「嗚乎等しき人間、天の下、地の上の事実、如何に解釈すべきぞ、生命其れ自身驚くべく畏る可しとすれば、この地上に捨てられたるこの生命の命運は更に意味ある驚懼の事実非ずや。」（『欺かざるの記』明27・1・29）と、その事実により深い意味を見出し出そうとするのである。

△源叔父△は先にみたように、この世に存在することさえ忘れられた「有るか無きかに思はれし」人間であったが、△紀州△もまた「天地孤独」の「人情の世界の外」に葬りさられた孤児である。つまり、ふたりとも外部世界から孤絶した人間である。△源叔父△が「紀州は親も兄弟も家も無き童なり、我は妻も子もなき翁なり。我渠の父とならば、渠、我の子となりなん、共に幸ならずや。」と「佐伯町附属の品物」のように思われている△紀州△を自分の家に引きとるのも、あるいは自然であったかも知れない。存在を忘れられた△源叔父△が再び人々の噂にのぼるようになったのはこの頃である。

この作品はほとんど口を聞くこともない△源叔父△の内部を彼の歌声が暗示するように書かれているが、「呼びて酒吞ませば遂には

歌ひもすべし。されど其歌の意解し難し。否、渠はつぶやかず、繰言ならず、たゞをり／＼大き嘆息するのみ」であった△源叔父△も、△紀州△とともに生活するようになり、「海も山も絶えて久しく」聞くことのなかつた歌を「声高らかに歌」うようになる。「人情の外」に締め出された△紀州△は、依然として△源叔父△の愛を受容しようとはしないが、独歩はふたりの暖かい交流を期待して次のように書く。「紀州とても人の子なり、源叔父の帰り遅しと門に待つやうなりなば、涙流すものは源叔父のみかは。」と。一方△源叔父△の内部には、そうした関係にもかかわらず、充足した平安と△紀州△に対する夢があった。それはたとえ次のように記される。「家には待つものあり、渠は炉の前に坐りて居眠りてや居らん、乞食せし時に比べて我家のうちの楽しさ暖かさに心溶け、思ふこともなく燈火打見やりてや居らん、わが帰るを待たて夕餉了へしか、槽こぐ術教ふべしといひし時、うれしげに点頭きぬ、言葉少く絶えず物思はしげなるは此迄の慣なるべし、月日経ば肉付きて頬赤らむ時もある」と。

しかし、「紀州は親も兄弟も家も無かりき童なり、我は妻も子もなき翁なり。我渠の父とならば、渠、我の子となりなん、共に幸ならずや。」という△源叔父△のことばは、現実のものとして結実することのない幻に他ならなかつた。しいていえば、それはあくまで作者独歩の願望であり祈りに過ぎなかつた。

『我子よ今帰りしぞ。』と呼び櫓置く可き処に櫓置きて内に入りぬ。家内暗し。

『こは如何に、わが子よ今帰りぬ、早く燈点けずや。』寂として応なし。

『紀州々々。』寵馬のふつどかに啣くあるのみ。

翁は狼狽て、懐中よりまつち取出し、一摺すれば一間のうち俄に明くなりつ、人らしき者見え、暫時して又暗し。陰森の気味下より起りて翁が懐に入りぬ。手早く豆洋燈に火を移し四辺を見廻はすまざし鈍く、耳そばだてて『我子よ。』と呼びし声覆れて呼吸も迫りぬと覺し。

(中略)源叔父は顔を両手に埋め深き嘆息せり。此時もしやと思ふ事胸を衝きしに、つと起てば大粒の涙流れて頬つたふを拭はんとはせず、柱に掛けし絛燈に火を移していそがはしく家を出で、城下の方指して走りぬ。

△源叔父△は△紀州△との楽しい未来の生活を空想しながら、櫓を肩にかついで急いで帰ってくる。しかし、自分を待っているべき△紀州△はいない。△源叔父△にとって△紀州△は、生そのものであり、未来であった。△紀州△の失踪(もともこの時には△紀州△は連れ戻されるが、翌日再び△源叔父△のもとを去って帰ってこない。△紀州△を失った△源叔父△は、生きる望を失い路傍の松に首をくくり死んでしまふ)を知った時の△源叔父△の驚き悲しみは引用文にもみられるように実に深い。その悲しみは、実質的には△源叔父△の△紀州△に対する夢(理想といってもよい)がこわれたところに起因している。言葉を換えていえば、△源叔父△の浪漫が現実の中で敗北していったところにある。「源おぢ」の悲劇は△源叔父△の死にあるのではなく、ここにみられる△紀州△との別離にあり、主題もまた△源叔父△がいかに愛情を注ごうともそれを受容しようとはしない△紀州△の存在そのものにある。

△源叔父△と△紀州△を結びつけた独歩の「想」とはいったい何

であったかというところから、「源おぢ」を読んできたわけであるが、それはふたりのこうした離別ではなかつたろうか。独歩は「源おぢ」完成前の日記に「我身を詩人の一人と思ひ定めつ、或物書き成さんとして此の地に来りぬ。或物とは何ぞや。あゝ或物とは何ぞや。過ぎし幾歳の事件、眼閉づれば幻と浮びて鮮やかに現はれ来る。山や河や、言ふまでもなし。彼の人の事、此の人の事、三年昔の一夜の事、二年前の朝の事。あゝ何物か詩料ならざる。これを描きて詩と成し上げん術もがな。経歴以外の事を誰か書き得ん。現ならざりし事を誰か夢み得ん。」(明30・4・28)と記しているが、△源叔父△も△紀州△もまさしく独歩のいうところの「或物・詩料」であった。また、独歩は実在の人物を作品化する際の注意すべきことがらとして「実在の人物、実際の事件之れ自身が如何に面白く思はれても、之れを直ちに筆に上すは真の詩を得る道に非ず。必ずこれを心底最も深き処に蔵して其醗酵を待たざる可からず。然からざれば其詳細の事実は忘却し易いから写生文とは縁が益々遠くならんも、人生の真に触れたる詩を得ることに於て誤は此外にあるまじと思ふ。」(「予が作品と事実」)と述べているが、「眼閉づれば幻と浮びて鮮やかに現はれ来る」△源叔父△と△紀州△は独歩の「心底最も深き処に蔵」され、詩的醗酵を待って現出した人物である。岩永胖は独歩の「想」を「佐々城信子との恋愛に破れて主観的には如何に熱烈であっても、受ける相手にはその愛が毫末も受けとめられない人間の宿命」これが独歩の内部に醗酵して初めて両者を結びつける想となり得たのだ。(学習研究者版『国木田独歩全集』第七巻附録)と極めて直観的に述べているが、この指摘は鋭い。

独歩は信子が失踪した顛末を「欺かざるの記」に「悲しき事実」

と題して詳細に記しているが、その一部を次に引く。

青年会散じて帰路富永氏の宅に同道し、午後四時過ぎ家に帰り

ぬ。

信子あらず。余は一種異様の感あり。

(中略)余は激する心を抑へて食事に対しひぬ。されど一口も喉に下らざるなり。(中略)直ちに家を出でぬ。此の時暮色已に蒼然たり。

「信子あらず」、独歩にとつてはありえないことであつた。あらゆる艱難と辛苦を越えて得た信子であり、「信子は満腹の愛と信とをわれにさゝげつゝあり」(『欺かざるの記』明29・2・12)と記した独歩であつた。信子の失踪を知つた独歩の衝撃と悲しみは容易に想像できる。

このことを心にとめて、△紀州▽失踪の場面をもう一度見直すと、事情はより明白になってくる。△紀州▽の失踪を知つた時の△源叔父▽の心情は、信子の失踪を事実として認めざるをえなかつた独歩の心情とほとんど重なり合っている。さらにいえば、△源叔父▽の発した「紀州」「わが子よ」という失意と悲痛の聲は、信子を失つた独歩の直情的な表白であつたといつてよい。繰り返して言うが、△源叔父▽と△紀州▽を結びつけた独歩の「想」は、兩者の離別そのものであり、その発想の直接的な根源は「信子今頃は染井の墓地に卒倒し居らざるかなど考へ至る時は血の凍るが如くに感じ、気も狂はん計りなりき。(中略)未だ嘗てかくまでに天地の悲哀を感じたる事なかりき。」(「悲しき事実」)と記した独歩の衝撃と悲哀である。

五

それではここで「武蔵野」よりも「源おぢ」の方がなぜ先に書かれたのかという最初の問いに戻つて考えてみたい。

「武蔵野」は『欺かざるの記』における自然描写を原核とする作品であつたが、それは失つた信子への愛惜の情とともに記されていた。つまり、信子を失つた独歩の孤独がとらえた自然であつたといつてもよい。理想主義者独歩の浪漫が現実には敗北した悲痛がとらえた武蔵野の美である。逆に言えば、武蔵野の美が生きいきと肉迫してくるのは、その中に独歩の青春の烈しい痛みが内包されており、その美が信子に対する思慕の情を理知的に拒絶している独歩の内部の悲哀にうらうちされているからである。こうして辿つてくると、「武蔵野」の構想から完成までの年月は、信子へのたちがたい未練を主知的に拒絶しようとする独歩内部の葛藤の期間であつたことがはっきりしてくる。

「武蔵野」の完成が信子との破局による悲痛を理知的に越えることによつてのみ可能であつたと考える時、「源おぢ」は実に興味深い意味をもつて現われてくる。つまり、「源おぢ」は、信子との離別による衝撃と悲痛を乗り越え、たちがたい信子への未練を断ち切るために書かれたのではないか。それが△源叔父▽△紀州▽といつた抽象的な形で虚構化されたのは、独歩にとつてあまりに近しい悲しみであつたからに他ならない。そして「武蔵野」は、独歩がひとまず「源おぢ」を書くことにより内面の整理をし、『欺かざるの記』にある信子に関する記述を削除することにより完成されたのである。このことを補説する意味で、「源おぢ」の半年後、「武蔵野」の

ほぼ二カ月前に発表された「おとづれ」について触れておきたい。

この作品に関して独歩は「自分の作た『おとづれ』が国民の友に出た。これが第二の小説である。世間は冷かに迎へても宜しい。△子は書き送た、『この「おとづれ」読み玉ひし人多き中に初の一字より終の一字まで涙と共にくり返し／＼読たるは妾一人ならん」と。自分は満足である。悲しい満足を感ずる。実は北海道の乙女にも読ましたい。」（「一句一節一章録」と素直に自己の心情を吐露している。△子とあるのはのち独歩夫人となる榎本治子のことであり、北海道の乙女とあるのは言うまでもなく信子のことである。「おとづれ」は独歩と信子の後日譚ともいうべき作品であるが、この作品を書いていた独歩の内部に、かなり色濃く信子の像があったことは右の引用がよく示している。「おとづれ」は、信子と想像される千葉富子に、独歩と目される宮本二郎の友人「吾」が二郎の様子を書き送るといふ形式がとられているが、こうした構図は愛の破局を客観的にみようとする意図からとられたものである。

おおよっぱにあらすじを辿ってみると、二郎は病を養うために、また多少の計画もあって南洋に立とうとするが、それは表向きの理由であって、実は富子との失恋によって傷ついた心を癒すためであった。友人たちはその真意を知らぬまま二郎の送別会を開く。翌朝早く二郎は富子の写真一葉と短い手紙をわたしに残して出帆する。一年二カ月の後、横浜行の列車の中で偶然帰国した二郎とわたしは富子と再会する。富子は二郎よりもやや年長の富豪宇都宮時雄と一緒であった。二郎は臆する様子もなく富子の正面に座るが、ふたりは親しくことばを交わすことなく別れる。その夜、二郎とわたしは船上で杯を交わし合い、わたしはかつて二郎から預かっていた富子

の写真を返す、といったものである。

こうして骨子を辿ってみると、人物関係もわりあい整然としているが、実際は必ずしもそうではない。この作品は、先に述べたように独歩と信子との失恋、そしてその後を客観的に記そうという意図によって書かれたものであるが、そうした意図を離れて独歩の胸中があらさまに露呈されていて統一がとれていない。

特に引用して説明することはもはや紙数も尽きたので避けるが、二郎と「吾」との間にことさら距離をおこうとしている独歩ではあるが、両者はほとんど重なり合い混乱さえ生じている。冷静に自己を客体化し、過去をふり返るといふ視点を越えて独歩の個人的詠嘆ばかりが目につく。独歩が自己の失恋を客観的に沈着に作品として定着させるまでにはさらに長い年月が必要であり、「鎌倉夫人」（明35・10）、「第三者」（明36・10）といった作品まで待たねばならない。しかし、△源叔父△紀州△といった抽象的な形で虚構されていた独歩の現実における挫折と敗北が直接的具象的にとりあげられ、さらに、「武蔵野」の完成をより可能にしたという点ではこの作品は実に意義深い。

ともあれ「源おち」は、世間からほとんどかえりみられることのない孤児△紀州△に「天地生存の不思議」を見、この世に存在することさえ忘れられた△源叔父△の一生に「人情の幽音悲調」を聞くこととする独歩が、両者を同じ位相でとらえ、その悲劇的離別を描出しようとしたものであるが、それは独歩の現実と切実にかかわるものである。

さらに、処女作前後の作品を独歩内部の実態にそくしてみれば、

「たき火」(明29・11)ここではふれることができなかつたが、『山高水長』に収められた詩「たき火」と同内容のもの)の孤独な老翁は信子を失った独歩の心情と密接なつながりがあり、「源おち」の悲劇は独歩と信子との不自然な愛の破局が抽象的な形をとつたものであり、「おとづれ」はそれをより直接的具象的に描出しよりとしたものであり、「武蔵野」の美は信子への未練の情を理知的に拒絶している独歩内部の痛みを内蔵している。そして、こうした作品群を通して初めて、現実から一步退いた形で独歩は自己の失恋を客体化することができ、「鎌倉夫人」「第三者」といった作品が可能になつたのである。

【付記】

独歩の文章の引用は、全て学習研究者版・国木田独歩全集によつた。なお、引用に当たって、旧字体の漢字は新字体に直し、圏点傍線の類はすべて省略した。